

“子どもの貧困と家庭でのかかわり” 教育委員会委員 橋本 和明

近年、よく「子どもの貧困」ということが叫ばれるようになりました。その貧困率は上昇を続けておりながら、それを食い止める決定的な施策が打ち出されないもどかしさも感じています。貧困はしばしば子どもたちの教育面に大きな打撃を与えられています。経済的に苦しいと、子どもに参考書などを買ってやれない、あるいは学習塾や習い事に通わせてやれない、といったことが生まれ、学力低下などを招くと指摘する人もいます。また、生活のために親が長時間、もしくは深夜遅くまで就労せねばならない状況に陥り、親子のコミュニケーションが少なくなったり、気持ちの上でもゆとりが生まれなくなったりするかもしれません。

しかし、ある研究結果によると、いくら経済的貧困であったとしても、朝食を毎日摂る、起床や就寝の時間が決まっている、テレビやゲームの時間が短いなどの生活習慣の指導がきちんとなされていたり、保護者が常に子どもの進路に期待したり、運動会や参観などの学校行事には参加するといった家庭環境にある子どもの学力は高い傾向があると報告されています。つまり、生活に規律やリズムがあり、親が子どもに常に関心と期待を向けていることが大切なのです。それさえもなされなくなると、経済的貧困に加えて、精神的貧困を招いてしまい、ますます事態は悪くなるのかもしれません。

また、子どもの貧困対策の一つとして、地域の居場所作りへの取り組みが盛んになされるようになりました。これも、貧困ゆえに子どもが孤立したり、精神的貧困とならないための重要なシステム作りです。昔々は寒い時に子どもたちがおしくらまんじゅうをして遊んだり、身を寄せ合って互いに暖めあったりしたものです。一人でいたら風も冷たく感じられたのが、みんなでいるとなぜか寒さが感じられなかったことを思い出します。子どもの貧困対策には、このような地域や周囲の支えも絶対に必要なのです。